

日本の季節区分（歌謡曲・唱歌・民謡・文学作品）が表現する季節

Season to Japan of season Classification (popular song, songs, folk songs
And literature works) to express

気象予報士 富沢 勝

Certificated weather forecaster

TOMIZAWA Masaru

1. はじめに

本報告は、筆者が長年仕事の上で調べた、暦と季節のかかわりを縦系に日本の民謡や唱歌、歌謡曲、文学作品などを横系にして織り込んだ内容となっている。日本の季節は、春夏秋冬と四季で代表されるが、それぞれの季節にふさわしい言葉、表現、それを唱歌や日本民謡、歌謡曲、日本文学などでわかりやすく解説しようとしたものである。

日本にはそれぞれの季節にふさわしいたくさんの言葉が、和歌や俳句、文学作品、そして民謡、唱歌、歌謡曲（流行歌）などに表現されてきた。数限りない季節の言葉や歌、文学、和歌、俳句があり、とても全てを紹介できるものではないが、そのごく一部を紹介する。

2. 二十四節気および雑節

温帯地域がほとんどの日本列島は、春夏秋冬の四季がある。（梅雨を入れて五季という説もある）気象庁では春は3～5月、夏は6～8月、秋は9～11月、冬は12月～2月と決めている。今の暦以前は太陰暦で、閏月もあって暦と季節は必ずしも一致していなかった。そこで人々は二十四節季によって季節の推移を実感していた。

ここで、二十四節季とは何か説明する。元は古代中国の黄河中流域で決められた陰暦の季節区分である。太陰暦の一年を太陽の黄経に従って二十四等分し、各区分点の日にその季節を表す呼称をつけたものであり、日付は、年によって若干前後する。おおよそ15日毎に小寒→大寒→立春→雨水→啓蟄等と季節が進んでいく。表-1に国立天文台のホームページから「二十四節気および雑節」を引用する。

季節の推移は吉田兼好の徒然草 155 段等や明治時代の自然主義文学の国木田独歩の「武蔵野」あたりが一つの参考になるのではないかと考えられる。徒然草 155 段では「春暮れて後、夏になり、夏はてて、秋の来るにはあらず。春はやがて夏の氣をもよほし、夏より既に秋はかよひ、秋は則ち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅もつぼみぬ。

木の葉のおつるも、まづ落ちて芽ぐむにはあらず、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣、下に設けたる故に、待ちとるついで甚だはやし」

表1、二十四節気および雑節(2019)

二十四節気および雑節

平成31年(2019)

名称	太陽黄経	中央標準時		名称	太陽黄経	中央標準時	
小寒	285度	1月06日	0時39分	寒露	195度	10月08日	23時06分
大寒	300度	1月20日	18時00分	霜降	210度	10月24日	2時20分
立春	315度	2月04日	12時14分	立冬	225度	11月08日	2時24分
雨水	330度	2月19日	8時04分	小雪	240度	11月22日	23時59分
啓蟄	345度	3月06日	6時10分	大雪	255度	12月07日	19時18分
春分	0度	3月21日	6時58分	冬至	270度	12月22日	13時19分
清明	15度	4月05日	10時51分				
穀雨	30度	4月20日	17時55分	土用	297度	1月17日	19時15分
立夏	45度	5月06日	4時03分	節分		2月03日	
小満	60度	5月21日	16時59分	彼岸		3月18日	
芒種	75度	6月06日	8時06分	土用	27度	4月17日	16時14分
夏至	90度	6月22日	0時54分	八十八夜		5月02日	
小暑	105度	7月07日	18時21分	入梅	80度	6月11日	13時32分
大暑	120度	7月23日	11時50分	半夏生	100度	7月02日	12時31分
立秋	135度	8月08日	4時13分	土用	117度	7月20日	8時23分
処暑	150度	8月23日	19時02分	一百十日		9月01日	
白露	165度	9月08日	7時17分	彼岸		9月20日	
秋分	180度	9月23日	16時50分	土用	207度	10月21日	1時57分

出典:国立天文台 HP より

国木田独歩の「武蔵野」は「武蔵野のおもかげは今、わずかに入間郡に残れり」で始まる小説である。この中で、独歩は明治29年の秋の初めから翌春の初めまで、渋谷村(今の東京渋谷区)の小さな茅屋に住んでいた時の日記の描写である。秋の初め9月7日のところは以下のような表現である。

「昨日も今日も南風強く吹き雲を送り雲を払い、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるとき林影一時に煌(きら)めく」中略、11月4日「天高く気済む、夕暮れに独り風吹く野に立てば、天外の富士近く、国境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一点、暮色漸く至り、林影漸く遠し」数日おきに描写が翌春まで続く。この項の最後のところは、3月21日で「春や襲いし、冬や遁れし」であった。

表2、 気圧配置型の季節区分 (1941-1970) (吉野・甲斐, 1977)

初春	3月 1日～3月 11日	17日間
春	3月 18日～5月 4日	48日間
晩春	5月 5日～5月 21日	17日間
初夏	5月 22日～6月 10日	20日間
梅雨	6月 11日～7月 16日	36日間
夏	7月 17日～8月 7日	22日間
晩夏	8月 8日～8月 20日	13日間
初秋	8月 21日～9月 11日	22日間
秋雨	9月 12日～10月 9日	28日間
秋	10月 10日～11月 3日	25日間
晩秋	11月 4日～11月 25日	22日間
初冬	11月 26日～12月 25日	30日間
冬	12月 26日～1月 31日	37日間
晩冬	2月 1日～2月 28日	28日間

気象学者の吉野正敏氏と甲斐啓子氏が天気図の気圧配置を30年間分にわたって気圧配置型を決定し、それを調べて14の季節区分に分類したものを「日本文学と気象」1978年(中公新書)より引用して示す。

次に季節にまつわる歌を挙げて

みる。

“春の歌”

「おぼろ月夜」 文部省唱歌 1914(大正3)年 詞 高野 辰之 曲 岡野 貞一

菜の花畠に 入日薄れ 見わたす山の端 かすみ深し
春風そよ吹く 空を見れば 夕月かかりて においあわし

里わの火影も 森の色も 田中の小道を たどる人も
蛙のなくねも 鐘の音も さながらかすめる おぼろ月夜

“夏の歌”

「八十八夜」

立春から88日目。陽暦の5月1日か2日にあたり、播種の適期とされる。茶どころでは茶摘みの最盛期となる。昔から「八十八夜の別れ霜」とか「忘れ霜」とかいて、おそ霜は農家にとって恐ろしいものとされている。この頃が最後の霜であり、北海道や本州の山岳地帯を除けば、これ以後は霜が降りない。

「茶摘み」 文部省唱歌 1912(明治45)年

夏も近づく八十八夜 野にも山にも若葉が茂る

あれに見えるは茶摘みじゃないか あかねだすきに菅の笠

日和つづきの今日此頃を 心のどかに摘みつつ歌う

摘めよ摘め摘め摘まねばならぬ 摘まにや日本の茶にならぬ

「懶（ものう）げな雨」

「物憂し」は気が進まない、こころが晴れないなどの意味。「懶惰」（らんだ）の懶の字をあてていることから、倦怠感のある、うんざりしたようないやいやながら、といった気分を含むのであろう。（「四季のことば辞典」より）

梅雨前半の陰鬱なシトシト雨のような感じだろうか。

「どうぞこのまま」 1976(昭和51)年 丸山 圭子 詞・曲・歌

この確かな時間だけが 今の二人に 与えられた
唯一の あかしなのです ふれあうことの喜びを
あなたの くもりもりに感じて そして 生きているのです
くもりガラスを 伝わる 雨のしずくのように
ただ ひとすじに ただ ひとすじに ただ ひたむきに

それは ばかげたあこがれか
気まぐれな 恋だとしても
雨は きっと 降り続く
くもりガラスを たたく 雨の音 かぞえながら

* どうぞ このまま どうぞ このまま

どうぞ やまないで

さよならは 涙とうらはら
さめたコーヒーの ようなもの
だから いつまでも このまま
米印2回くりかえし

「山小屋の灯」 1947(昭和22)年 米山 正夫 詞・曲 近江 俊郎 歌

たそがれの灯は ほのかに点りて 懐かしき山小屋は 麓の小路よ
思い出の窓により 君を偲べば 風は過ぎし日の 唄をばささやくよ

暮れゆくは白馬か 穂高はあかねよ 樺の木のほの白き 影もうすれゆく
さびしさに君呼べど 我が声空しく 遥か谷間より こだまは帰り来る

山小屋の灯は 今宵も点りて 独り聴くせせらぎも 静かにふけゆく
あこがれは若き日の 夢をのせて タベ星のごと み空に群れ飛ぶよ

“秋の歌”

9月1日は「二百十日」(雑節)「防災の日」

9月は、始めはまだ残暑の厳しい日々もあるが、中旬頃からは秋雨前線が本州の南岸付近に停滞し、秋の長雨シーズンに入り気温も下がってくる。そして、秋の彼岸を過ぎる頃から、秋の気配が色濃くなってくる。

二百十日～雑節のひとつ。立春から数えて210日目頃で、9月1日ごろにあたる。(2019年は9月1日)このころは米作りの上で重要な稲の開花期であり、台風の襲来を恐れて、農家では厄日として警戒してきました。しかし、米作りの技術が進み、稲の開花はかなり早くなっています。また統計的にも二百十日前後に台風が多いという事実はなく、大型の台風は9月16～17日や26～27日に多く来襲している。(但し、東京の最大瞬間風速は1938(昭和13)年9月1日の台風)

「おわら風の盆」富山県婦負郡八尾町(今は富山市) 9月1日～3日

北陸・富山に初秋の訪れを告げる祭りである。八尾町では9月1日～3日までを「風の盆」と呼ぶ。二百十日の台風封じ、風を和らげる祈願をして、五穀豊穰を祈る。町民は民謡「越中おわら節」を歌い、哀調豊かな胡弓や三味線の調べに合わせ3日3晩踊り明かす。数千のぼんぼりに灯がともる中で、踊り手たちが影絵のように浮かび上がる。町全体が幻想的な雰囲気に包まれる。昨今は、優雅な舞いを一目見ようと全国から観光客が殺到し、町は対策に頭を悩ませているという。(共同通信「ニュース予定」より)

風に対する日本人の関心や知識が、時代とともにどのように変化して今日にいたったかを、史料に基づいて、気象学の立場から回顧した名著「日本の風」(田口 龍雄著 昭和37年6月30日発行 東京都千代田区竹平町気象庁内 財団法人 気象協会)によれば「各種の異常な状態などに着目する方法ではなくて、特に荒天の起り易い、いわゆる特異日を知って予知に利用しようとの試みもあった。最も広く一般に知られたものは二百十日で、その起源などについても諸説はあるが、米作の豊凶に最も関連の多い時期の大風として重視されたのであろう(風祭)。二百十日の外に、二百二十日や八朔(陰暦8月1日)を「風の厄日」と称して、大いに警戒したものである(甲子夜話)。

二百十日前後に大風の吹かない年もあって、これは夏の土用になってから度々風雨のあるような年とか、初秋以来、毎晩北風の卓越する年に多いとされているが(全流舟軍之巻)。「二百十日がなしくずしになった」(森 鷗外、雁)などと言うのに関連がありそうにも思われる。

いわゆる厄日の天候が、米相場に大いに影響して、悲喜こもごもの事件を起した物語は近代にも求められるが(幸田 露伴、風流微塵蔵)、この日が無事平穏に過ぎる事は農

家にとっては、大きな歓喜であった。

越中八尾はおわら節の名所であるが、二百十日を「風の盆」（盆は休日の意味）と称し、町を挙げておわら踊りを楽しむ。

二百十日に風さえ吹かにゃ 早稲の米食て踊ります（越中おわら節、日本民謡集）

特殊な風祭のための社寺が創建された例もある。富山県下にはこの種の御堂（俗に「吹かぬ堂」と言い大風の吹かぬように祈る御堂の意味）が十数箇所があり、特に今、級長戸辺神社（東砺波群南山田村是安）と称しているものは、寛文二年（1662）の創建と伝えられる（伏木測候所気象雑篇）。これらの「吹かぬ堂」の中には仏教に由緒を持つものもあるが、いずれも局地的強風（南より）の卓越する地帯に分布している。

風神を信仰の対象としてではなく、芸術上の素材として取り上げた傑作としては、俵屋宗達の風神雷神図（世界美術全集、二十一巻）彫刻では三十三間堂の風神雷神像（日本国宝全集、二十六輯）などは、いずれも国宝である。

それらの風神は風の袋を背負っており

風の神 背中を流す 姿なり（柳尊）

と川柳子は詠んだ。

箱根に風祭という地名（登山鉄道の駅名にある）があり、享和の頃（1801）は箱根越えの休息所であったらしいが、（改元紀行）実際に風祭が行われたかどうか、適当な史料を見出し得なかった。

「越中おわら節」 富山県民謡「日本民謡集」岩波文庫より
この民謡の起源については諸説ある。

「前囃子」 歌われよ わしゃ囃す

来たる春風 エー氷が解ける（キタサノサーアー ドッコイサノサッサ）

うれしや気ままに オワラ開く梅

「後囃子」 三千世界の松の木ア枯れても あんと添わなきや娑婆へ出た甲斐がない

（キタサノサーアー ドッコイサノサッサ）

（古調）

あいや可愛いや いつ来て見ても

たすき投げやる 暇がない

たすき投げやる 暇あるけれど

あなた忘れる 暇がない

山へ登れば いばらが止める

いばら離しやれ 日が暮れる

お前ひとりか 連衆はないか

連衆アあとから 駕籠で来る

ホッとため息 小粋をながめ

こうも糸嵩 ないものか
盆が近うなりや 紺屋へ急ぐ
盆の帷子 白で着しょう
あねまどこへゆく 餅草摘みに
おらも生きたや びくさげて
二百十日に 風さえ吹かにや
早稲の米食て 踊ります
殿まと旅すりや 月日を忘れ
鶯鳴くそな 春じゃそな

(新調)

八尾よいとこ 蚕の都
秋は野山も 唐錦
城ヶ山から 白帆が見える
二つ三つ四つ 有磯海
若しや来るかと 窓押しあけて
見れば立山 雪ばかり
八尾坂道 別れて来れば
露か時雨か ハラハラと
八尾おわらを しみじみ聴けば
昔山風 草の声

(後囃子)

浮いたか瓢箪 軽そに流れる
行くさきア知らねど あの身になりたい
越中で立山 加賀では白山
駿河の富士山 三国一だよ
来られた来られた ようこそ来られた
来られたけれども 我が儘ならない
南蛮鉄のような 豪傑さんでも
あんたにかけては 青菜に塩だよ
七合と三合は どこでも一升だよ
一升と定まりや 五合枴いらない

「小春日和」

小春のころの暖かい日和。なお、小春とは（暖かで春に似ているからいう）陰暦

10月の異称である。(「広辞苑」より)

陰暦の10月は陽暦では大体11月から12月上旬に当たる。この頃はもう寒くなり、風が冷たく感じられる。ところがこの時期に暖かで穏やかで春を思わせる陽気になることがあり、これを小春日和と呼ぶ。(「空の名前」 高橋健司著・写真 光琳社出版より)

天気図を見ると移動性の高気圧型になっていて、しかもその高気圧が、中国南部からの南方コースのものであったりする。高気圧が南に下がっていく途中、暖められた空気の塊が、日本へやって来るため、わずか1日くらいしか続かないが、風静かな暖かい天気が見られるのである。

平年では小春日和は11月に3~4回、12月に1~3回くらい出現している。小春日和の最高気温は、全国的に平年より3~4度高いことが多く、軽井沢で15度、東京で20度に達することもある。日なたぼっこに最適の日和だ。かあさん、縁側、肩たたき、猫の昼寝、陽がいっぱい、それが小春日和の風景である。(「カラー気象歳時記 山溪カラーガイド」より)

「千曲川のスケッチ」 島崎 藤村 著、岩波文庫より 1943(昭和18)年1刷
最初の発表年は1911(明治44年)6月「中学世界」に連載、作者39歳

「小六月」

気候は繰り返す。暖かな平野の地方ではそれほどきわだって感じないようなことを、ここではせつに感ずる。寒い日があると思うと、またばかに暖かい日がある。それからまたいっそう寒い日が来る。いくら山の上でも、一息に冬の底へ沈んではしまわない。秋から冬になるころの小春びよりは、この地方での最も忘れがたい、最もここのよい時の一つである。俗に「小六月」とはその楽しさを言いあらわした言葉だ。

「小 春」国木田 独步 著 新文学書房より 1967(昭和42)年

最初の発表年は1900(明治33)年12月、『中学世界』 作者29歳

「一年の熱去り、気は水のごとく澄み、天は鏡のごとくに磨かれ、光と蔭といよいよ明らかにして、いよいよ映照せらるるとき」である、気が晴々する、うちにもどこか引き緊るところがあつて心が浮つかない。断行するにも沈思するにも精一ぱい出来る。感情も意思も智力もその能を尽くすべき時である。冬はいじけ春はだらけ夏は痩せる人でも、この季節ばかりは、健康と精力とを自覚するだろう。それで季節が季節だけに自分のオーズオルス詩集に対する心持がやや変つて来た、少しはしんみりと詩の旨を味わうことが出来るようである。自分は南向きの窓の下でガラス越しの日光を避けながら、ソネットの二三編も読んだか。...

「秋 桜」 1977(昭和52)年 さだ まさし 詞・曲 山口 百恵 歌

淡紅のコスモスが秋の日の 何気ない陽溜りに 揺れている
此頃 涙脆くなった母が 庭先でひとつ咳をする
縁側でアルバムを開いては 私の幼い日の思い出を
何度も同じ話くりかえす 独言みたいに小さな声で
こんな小春日和の穏やかな日は あなたの優しさが浸みてる
明日嫁ぐ私に 苦勞はしても
笑い話に時が変えるよ 心配いらないと 笑った

あれこれと思い出をたどったら いつの日もひとりでは なかったと
今更乍ら 我まな私に 唇かんでいます
明日への荷造りに手を借りて しばらくは楽し気にいたけれど
突然 涙 こぼし 元気でと 何度も何度も くりかえす母
ありがたい言葉をかみしめながら 生きてみます 私なりに
こんな小春日和の穏やかな日は もう少しあなたの
子供でいさせて下さい

“冬の歌”

「天気（境）界」冬には降水があるところとないところの境界（天気界）がはっきりしている。天気界は日によって変動するが、清水トンネルのある三国山脈は、いつも決まって天気界になりやすい。（「衛星でみる日本の気象」 岩波書店）より）

この峠の表裏の気候の差は上越国境の山脈が北東から南西に連なり、北西の季節風をほぼ直角に遮断していることによって形成されたものである。日本海上を吹き渡ってきた季節風のもってきた水分は、この国境山地の風上側にドカ雪となってほとんど落とされてしまう。山地を吹き越えた雲の南端は、分水嶺を越え水上付近まで達し、小雪を降

らせはするがその南は快晴、冬枯れの関東平野へと続くのである。ここは日本でも天気界がいちばんはっきりしているところである。（山溪カラー「気象歳時記」より）

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に車が止まった。向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落とした。雪の冷気が流れ込んだ。娘は窓いっぱいになり出して、遠くへ叫ぶように「駅長さあん、駅長さあん。」明かりをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻きで鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうち

に闇に呑まれていた。:

(「雪国」川端康成 著 新潮文庫より)

「雪国」 作詞・作曲・歌 吉 幾三 1986(昭和 61)年

好きよあなた今でも今でも 暦はもう少しで今年も終わりですね

* 逢いたくて恋しくて泣きたくなる夜

そばにいて少しでも話を聞いて

追いかけて追いかけて追いかけて……雪国

窓に落ちる風と雪は 女ひとりの部屋には悲しすぎるわあなた

酔いたくて泣きたくてふるえるくちびる

そばにいて少しでもわがまま聞いて

追いかけて追いかけて追いかけて……雪国

好きな人はいるのあなた バカねバカな女ね意地をはった私

逢いたくて夜汽車乗るデッキの窓に

とめどなく頬つたふ涙のあとを

追いかけて追いかけて追いかけて……雪国

(*印くりかえし)

「雪化粧」 1974(昭和 49)年 山上 路夫 詞 猪俣 公章 曲 テレサ・テン 歌

窓をあけたら 外は粉雪 音もなくつもるわ 街の屋根に

好きなあの人 去ったこの街 冷たく長い 冬が来た

私はひとり 何を頼って 暮らせばいいの さびしい街で

愛の手紙を 燃やす暖炉の 炎が涙に ゆれているわ

コートはおって 外に出るのよ あなたの愛が のこる街

私は何を さがしにゆくの 足あと雪に のこしてひとり

遠い家並み 街の通りも きれいに白い雪化粧

私に春は 来るのでしょうか 愛した人が 見えない街で

「津軽恋女」1987(昭和 62)年

永井 俊一 原案 久仁 京介 詞 大倉 百人 曲 新沼 謙治 歌

津軽の海よ 竜飛岬は吹雪に凍えるよ
日毎夜毎 海鳴りばかり 愚図る女の泣く声か
津軽の女よ 別れうたひとつ くちずさむ
にがり酒に 想い出浮かべ かじかむころの 空を見る
※降り積もる雪 雪 雪 また雪よ
津軽には七つの雪が降るとか
こな雪 つぶ雪 かた雪 ざらめ雪 みず雪 かた雪 春待つ氷雪

津軽の女よ 枕乱して 引き込む恋女
愛に生きて 夢に生きて 白いかげろう 空に舞う
津軽の女よ ねぶた祭りのゆきずりたわむれか
過ぎた夜の 匂いを抱いて 帰れと叫ぶ岩木川
(※印くりかえし)

津軽の海よ 三味がゆさぶる じょんから聞こえるよ
嘆き唄か 人恋う唄か 胸のすきまに しみてくる
(※印くりかえし)
(※印くりかえし)

3. 雪の種類

ぼたん雪 {牡丹雪、綿雪、ぼたゆき、モチユキ} 牡丹の花びらのように大きな雪片ならびに降ってくる様子の呼称である。雪の結晶は上空では、一個一個の単独で、地表に向かって落ちてくる。結晶は落下途中で互いに触れ合い時には付着し合って地表へ達する。このとき気温が 0℃に近いところでは数十ないし数千の結晶が、一つの塊、すなわち雪片になってしまう。その大きさは数 cm、時には 10cm にも及ぶことがある。比較的温暖な地方や、冬の初めや終わりの、気温があまり低くないときに降ることが多く、湿り気がある。

「空の名前」高橋 健司著、写真には粉雪、綿雪、牡丹雪、根雪、新雪、べた雪、どか雪、細雪……など雪の字の出てくる項目(写真と解説コメント)が実に三十余を数える。朝日新聞の天声人語子は「雪の名が多彩なのは、状況をこまかく認識し分けた先人の感受性、観察力のすばらしさを語る財産である。」と評している。

日本雪氷学会「雪氷辞典」では、

新雪、しんせつ、あらゆき {new snow、newly fallen snow} 積もって間もない雪でまだ降雪の結晶形が残っているもの。降雪の結晶形や雲粒付き、あられ混じり等の現を用いて新雪を細区分することがある。新雪結晶ではとがった部分が蒸発し次第に丸るみをおび、他の雪質に変化するが、温度が低いほど、折衝が大きいほど変化は遅い。

風がなく低温で大きな結晶が静かに積もるときの新雪密度は小さい。

こな雪、粉雪 {powder snow} 降り積もったばかりの乾いた雪の呼称。一般にはアスピリンスノーとも呼ばれる。

つぶ雪 {grain snow} 道路雪氷では、粒子間にほとんど結合がない。

ざらめ雪 {granular snow, coarse-grained old snow} 雪粒が 0℃以上の気温や日射をうけると表面が融け水の膜でおおわれ、時間がたつと小さな雪粒同士が合体して大きな雪粒となる。これがざらめ雪で、融解と凍結を繰り返すと、急速にざらめ雪が発達する。

水べた雪 {slush} 融解が進み、含水率が非常に高い雪のこと。粒子間の結合は弱い。俗にシャーベット (状の雪) ともいう。

圧雪 (あっせつ) {compacted snow} 機械的におしつめられた雪。路面に積もった雪が、車の走行によって繰り返し圧密されたもので、雪粒子が高密度に充填され、かつ雪粒子が相互に網目上に結合した構造を持つ。

氷板 {ice layer} 積雪内に形成される板状の氷の層。厚さ 1 センチ前後になることもある。止水面の上に停滞した融雪水や雨水が水化したものである。氷化の原因は必ずしも寒気や夜間の放射冷却とは限らない。北陸地方ではとくに融雪期の 0℃のざらめ雪層の中で発達する。

太宰 治の小説「津軽」には表題の裏のページに津軽の雪として次の七種が出ている。しかし、小説本編にはこれといった記述はない。

こな雪 つぶ雪 わた雪 みず雪 かた雪 ざらめ雪 こほり雪

(東奥年鑑より) {ちくま文庫 太宰 治全集 7 から}

4. 結語

本研究ノートは、筆者が長年ラジオ・テレビ等気象解説の仕事上で調べた、暦と季節のかかわりを縦系に日本の民謡や唱歌、歌謡曲、文学作品などを横系にして織り込んだ内容となっている。日本の季節は、春夏秋冬の四季で代表されるが、それぞれの季節にふさわしい言葉、表現、それを身近な唱歌や日本民謡、歌謡曲、日本文学などでわかりやすく解説しようとしたものである。日々の暮らしの中で感じる季節感、季節の変化を歌や文学作品とともに紹介した。

引用文献

- ① 国立天文台 HP、気象庁 HP、「日本民謡集」岩波文庫、「四季のことば辞典」嶋岡晨 大和出版、
- ② 「徒然草」吉田兼好 岩波文庫、
- ③ 「武蔵野」国木田独步 新文学書房、「広辞苑」岩波書店、
- ④ 「衛星で見る日本の気象」岩波書店、「日本の風」田口龍雄 気象協会、カラー「気象歳時記」山と

溪谷社、

- ⑤「あの歌この歌」91版 CBS ソニー出版、
- ⑥「昭和流行歌詞」毎日新聞社、雑誌「太陽」N0245 演歌・艶唄・怨歌、「日本民謡集岩波文庫、「広辞苑」岩波書店、
- ⑦「千曲川のスケッチ」島崎藤村 岩波文庫、
- ⑧「小春」国木田独步 新文学書房、
- ⑨「雪国」川端康成 新潮文庫、
- ⑩「雪氷辞典」日本雪氷学会、「太宰 治全集 7」ちくま文庫、
- ⑪「空の名前」高橋健司 写真・文 光琳社出版、
- ⑫「四季の教科書」高橋健司 写真・文 教育出版

Season to Japan of season Classification (popular song,songs,folk songs
And literature works) to express

Certificated weather forecaster
TOMIZAWA Masaru

Season to Japan of season classification (popular song, songs, folk songs and literature works) to express in this paper,we have studied the relationship between calendars and seasonsas the warps of japanese folk songs and songs,etc.

japan's seasons are represented by spring,summer,autumn and and winter,
And four seasons,but the words,expressions,and so on appropriate for each season were tried to be explained in an easyj-to-understavid manner using chanting songs,Japanese folk songs,and songs.

In Japan,many wards that are appropriate for each season have been expressed in Wark and Haiku, literary warks,and folk songs, songs and songs (popular songs).There are countless seasonal words and songs,literature,waka and haiku, and it is not a very good introduction.We will be limited to a few introductions,but I would like to talk about it this time.